

リスタートを果たした日本のヒロイン 『私の第二の水泳人生が始まる』

文／田坂友暁

翻訳協力／田坂美佐紀

池江璃花子（ルネサンス／日本大学）がプールに帰ってきた。

日本にひとり、困難を乗り越えて、自分の夢を叶えるために戦いの場に返ってきた選手がいる。

2018年のアジア競技大会で前人見え等の6個の金メダルを獲得した池江は、8月29日、東京辰巳国際水泳場でカムバックを果たした。数々の日本新記録を更新してきたこのプールで行われたこの大会で、50m自由形に出場。2019年の2月に白血病であることを発表し、治療に専念していた彼女が1年半ぶりとなるレースへの復帰を果たしたのである。

池江は、15歳で日本チャンピオンになった（50mバタフライ）。16歳でリオデジャネイロ五輪に7種目も出場（日本人初）。100mバタフライでは5位入賞を果たした。翌年の2017年には日本選手権で初の5冠を達成（50m、100m、200m自由形、50m、100mバタフライ）。18歳で出場したアジア競技大会では、6冠（50m、100m自由形、50m、100mバタフライ、400mフリーリレー、400mメドレーリレー）を達成して大会MVPにも選ばれた。

本来であれば、2019年のFINA世界選手権（韓国・光州）をステップに、2020年東京五輪で金メダル獲得を目標に走り続けるはずだった。

何もかもが順調に進んでいた矢先に訪れた試練。その闘病生活は、池江が思っていたよりもはるかに苦しいものだった。

しかし、彼女は返ってきたのだ。病に打ち勝ち、自分の手で夢を掴むために。

リスタートの第一歩となるレース本番。どこか緊張した面持ちの池江。自分が泳ぐ順番になり、スタート台の後ろに立ったとき、まるで子どもが初めて水泳の大会に出場したときのような、興奮と緊張が入り交じった、少しこわばった笑顔を見せていた。

号砲が鳴り響き、スタートする。浮き上がりは他の選手たちと変わらない。だが、25mを過ぎるころには頭ひとつ抜け出し、最後には身体半分のリードを奪ってフィニッシュ。記録は、26秒32。彼女が持つ24秒21の日本記録にはほど遠いものの、レースに復帰するというひとつの目標を達成した彼女の表情には笑みが浮かんでいた。

泳ぎ終えたあとも、興奮が収まらない様子。何度も電光掲示板を振り返りながらプールサイドを歩いていく。共に病と闘ってきたマネージャーの姿を視界に捉えると、涙と笑顔が一気にこぼれ落ちた。

「今日は楽しんで泳ぐことがメインでした。実際、とても楽しめたと思います。応援してくださる皆さんに、泳ぎを通して元気になった姿を見てもらえることができてホッとした気持ちもあります。」

「ラスト15mで1回呼吸を入れたんですけど、そこで一気に疲れが来てしまいました。腕

が回せない、足も動かせない。周りに追いつかれるんじゃないか、と思ってちょっと空回りしてしまいました。でも、負けたくない、って思いましたし、そういうアスリートとしての強い気持ちが残っていたことがうれしいです」

そして、こう付け加える。

「また、ここから私の第二の水泳人生が始まるんだ、と思うと、胸がキュッと締め付けられるような気持ちになりました」

後日、彼女に改めてこの大会での泳ぎのことを聞くと、とても冷静な答えが返ってきた。「自分の力の7、80%くらいしか出せませんでした。緊張もありましたし、うまく身体を思うように動かすことができませんでした。ただ、35m まではすごく感覚も良かったです。筋力がまだついてきていないことも原因ですが、キャッチした水をしっかり最後まで押し切れていたのが、今は途中で抜けている感じです。そういう自分のイメージと実際の泳ぎのズレもありました。練習中、調子が悪い日は腰が下がって水の抵抗を受ける泳ぎになるところもありました。これらが見つけた課題ですね。テクニックの感じは悪くないので、まずはしっかり最後まで力を出し切れる身体作りをしていきたいと思っています」

1年以上、レースという戦いの場から離れていたにも関わらず、自分の泳ぎを冷静に分析し、次に向けた課題を見つける。池江は単に復帰した、というだけではなく、病を克服したことによって、アスリートとしての純度を高めつつあるのかもしれない。

病氣療養中に韓国・光州で開催された FINA 世界選手権。女子 100m バタフライの表彰台に立った Margaret MACNEIL (CAN)、Sarah SJOESTROEM (SWE)、Emma McKEON (AUS)らが、『Ikee Never Give Up Rikako』と、手の平に池江にメッセージを送った。

「残念なんですけど、その瞬間は病室にいてリアルタイムで見ることができなかったんですけど、ああいうメッセージを送ってくれたことを知って、とてもうれしかったです。年齢が同じの Margaret が優勝する姿や、一緒に練習をした Sarah や Emma が表彰台に上っている姿を見て、本来なら私も同じように表彰台にのぼれたかもしれない、という、少し悔しい気持ちもありました。でも、ライバルの選手たちが、彼女たちにとっても大事な試合だったにも関わらず、私を忘れずに待っていてくれる、私のことをライバルとして大切に思ってくれていることが伝わってきました。だからこそ、あの場所に戻って、彼女たちともう一度戦うことが、今の私のモチベーションです」

焦る気持ちはない。まだまだ筋力も体力も戻っていない。無理をしては元も子もないことは、池江自身がよく分かっている。それに、復帰後から師事しているルネサンスの西崎勇コーチもそれを理解し、身体作りからじっくりと強化を行っていく方針を立てている。

「水中練習の負荷を上げたり、量を増やしたりするのはまだ先です。まずは体力。筋力もそうですが、体重をベストな状態まで戻すことを最優先にしています」

池江も、目標は 2024 年のパリ五輪であると明言している。もちろん、あと 4 年しかないが、その目標に向かうスタートラインに立てたことが、何よりもうれしいと言う。

「久しぶりにレースに出て、ひと言で言えば初心に戻った感じがしています。振り返ると、気がついたら日本選手権に出ていて、いつの間にか日本のトップにいた。実のところ、そこにいたまでの課程で、レースで勝てなかったときのことをあまり覚えていないんです。でも、今は違います。勝てない今、はじめて悔しいな、という気持ちがふつふつとわいてきています。負けて、勝つことができなくて悔しい、という感情を持ったのは、いつぶりか思い出せないくらい、久しぶりでした。でもそういう気持ちが持てたということは、もっと上を目指せるということ。この気持ちを忘れずに、上を見て泳いでいきたいと思います。まずは、この夏に行われる日本学生選手権で良いタイムで泳ぐこと。そして、24年のパリ五輪で活躍できるように、焦らずに、落ち着いて、一步一步歩んでいきたい」

最後に池江は、彼女らしい、人を魅了して止まない満面の笑みで、世界中にいるスイマーたちにメッセージを送った。

「私は、世界大会でメダルが獲れるか獲れないかのライン上にいました。もしかしたら、同じくらいの記録を持つ選手たちは、ひとりライバルが減った、と思っているかも知れませんね。でも、このままで終わるつもりはありません。これから私は、もっと上にのぼりつめていくつもり。ライバルのみんな、待ってろよ！」

夢は、叶えるためにある。目標は、達成するためにある。それは誰にでも平等に与えられた権利であり、誰もが平等にチャレンジすることを許されている。たとえ、どんな困難があろうとも、どんな苦悩が待ち構えていようとも。意志があれば、いつでも、夢に、目標にチャレンジすることができるのだ。その輝きを取り戻すことも、さらにまばゆい光を放つこともできるようになる。池江璃花子という選手は、その泳ぎを通して希望を私たちに見せてくれることだろう。